

2022年横浜ナザレン教会降誕節第五主日(1/23)礼拝
「天の下、我らは生きる」使徒言行録第1章9節から11節

【聖書】

9 こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。10 イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、11 言った。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」

1 昇天？

今朝、ご一緒に聞きます聖書は、イエス・キリストの昇天を描いたものです。「しょうてん」と言っても日曜日の夕方の番組ではなくて、「昇る天」と書きます。主イエスの昇天は、十字架や復活と比べて説教で取り上げられる事も少なく、あまり深く考えたことがない事かもしれません。先ほど、共に告白した使徒信条においても、「天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまえり」という部分も、何の感慨もなく、ただ暗記して唱えているだけ、という事もあるでしょう。第一、「天に昇っていく」「雲に覆われて見えなくなる」など、昔話、おとぎ話のようでまともに考える気になれない、という面もあるでしょう。しかし、実はイエス・キリストの昇天には、実に大きな神の恵みが隠されているのです。その事を今日はご一緒に見ていきたいと思います。

2 神と共に支配される主イエス

先ほど、「天に昇っていき、雲に覆われて見えなくなった」というのは、おとぎ話のようだ、と言いましたが、勿論、主イエスは、飛行機が離陸するように物理的に空に昇って行った、というわけではありません。使徒言行録は古代に書かれた物語。古代世界のユダヤの人々は、世界は丸い大地の上に半球ドームの「天」が覆っているものであり、そこに星や月や太陽が張り付いている、その天の上に父なる御神のお住まいがあると考えていたようです。だから、イエスさまが「天に昇られた」というのは、イエスさまは父なる御神のおられる異次元の世界へと帰って行き、使徒達が、主のお体を手で触る事も肉眼で見る事もできなくなり、イエスさまのお声を実際に耳で聞く事もできなくなった、という事です。それから2000年経った今、私たちは、肉眼ではイエスさまを見る事もできないし、手で触れる事もできないし、その声を肉体の耳で聞く事もできません。他の人々と会話することができるように会話することは、不可能です。そういう意味では、私たちも幾度も経験している、大切な人が亡くなりもう会えなくなることと変わりありません。

しかし、イエスさまは滅んだわけではありません。眠りについたのでない。ペトロの手紙Ⅰに次のようにある通りです。「キリストは、天に上って神の右におられます。天使、また権威

や勢力は、キリストの支配に服しているのです。」イエスキリストは、この世界を離れ、神の御許へと帰って行かれ、今もそのみそばにおられ、神と共にこの世界を支配しておられる、つまり、主イエスは、時空を超える存在となられました。人間と同じ世界におられれば、永遠に生きるわけにはいきません、人間と同じ世界におられれば、同時に色々な所に現れるわけにはいきません。イエスキリストが、人間世界を離れ、父なる御神の傍におられるからこそ、私たちは心の目で主イエスを見、心の耳でその声を聴き、聖書や讃美歌や祈りを通して、主イエスと対話することができます。イエスキリストを感じ知ることができるのです。それもずっとずっと。目に見えるものは過ぎ去ります。が、主イエスは、天に昇られて過ぎ去らない者となられました。

3 まことの人

その主イエスの昇天の具体的な様子が描かれているのは、ルカ福音書と使徒言行録だけです。その一つ、使徒言行録第1章の9節から11節の聖書は、たった三節ですが、とても面白いものです。私たち教会では、人が亡くなった時には、「天に召される」の「召天」という言葉を使い、「昇る天」という「昇天」が使えるのは、ただお一人、主イエスだけ、だと言われています。神の独り子しか、自力で天に昇り、神の御許に赴くことはできない、私たち人間は、み神によって天に引き上げていただく、召しあげられるからです。

しかし、今日の聖書のみ言葉をよく見ていきますと、9節、「**イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが**」とあり、主語のない受け身です。聖書で主語のない受け身の場合は、神がなされた事だと言われています。主イエスもまた、父なる御神の御心によって天に引き上げられた、とここで語られています。そうかと思うと、11節では、「**天に行かれるのをあなた方が見たのと同じ有様で**」の「**天に行かれる**」の部分、受け身ではありません。イエスキリスト自身自身が自身の意志と力で天に昇って行かれた、と天使によって語られます。面白いなあ、と思います。先ほどの使徒信条でも、「天に召され」ではなくて、「天に昇り」とあります。いったい、どちらが正しいのでしょうか。

主イエスに限っては、どちらも正しいのだと思います。主イエスは、確かに神と等しい身分、神の独り子ですが、その一方で、真実に人間でもある方です。教会では、イエスキリストは、「**まことの神、まことの人**」だと信じられてきました。まことの人、真実の人間とは、神に造られ神の息吹が吹き入れられた本来の人間、神を神とし、神との深く強い引き離しがたい関係に生きる被造物、罪を犯したことの無い人。私たちの主イエスキリストは、「**まことの神**」であると共にそのような「**まことの人**」と言われるお方です。それは、父なる御神の御許に帰ったからと言って変わるわけではありません。主イエスが天に昇る際に、まことの人部分が抜け落ち、純粋に「子なる神」として、父なる神の右の座についているわけではないのです。それは、主イエスが、体を地上に残して天に昇って行ったのではない事から分かります。主イエスは、からだをもって天に昇って行かれました。どのようなお体でしょうか。

手首、足首には、十字架に磔けられた釘のあとがはっきりと残っており、脇腹には、槍で

刺し貫かれた傷跡があるお体です。主イエスが、私たち人間の罪を全部引き受けて、苦しみ抜いた、私たちの罪を全部償ってくださった、という徴をもって天の御神の傍らにおられます。

だから、主イエス・キリストが父なる神のみそばに帰られた時から、父なる御神は、十字架のイエス・キリストを通して、この世界をご覧くださるようになりました。つまり、父なるお方は、愛する御子が十字架でその罪を覆い隠し、償ってくださった者として私たち一人一人を見てくださる、受けとめてくださっています。主イエスの十字架ゆえに、私たちは神に赦された者となったのです。

だがしかし、何をしているか知らない、神を示されているにも拘わらず、神に聞き従わず、与えられた聖霊の御声をも無視して、互いに愛し合おうとはしない私たち。互いに理解し合おうともせず、自分を理解してもらおうこと、愛してもらおう事ばかりを求める私たちです、自分を正義だと思い込む私たちです。本当に父なる御神は、イエスさまを通して私たちを受けとめてくださるのでしょうか？

いえ、そうではないのです。私たちが罪びとであるからこそ、主イエスは昇天せねばなりません。全く罪のないまことの人でありながら、十字架に架かって私たちの罪を贖ってくださる主イエスが神の傍らにいらっしゃり、私たちを執り成してくださる必要があるのです。この主の執り成しがあるからこそ、私たちは、聖霊なる御神の力によって、主イエス・キリストの十字架による神の赦しの声を、何度も何度も聴き、心深く受け止める事ができます。罪ある私たちを滅びから救い出そうとするキリストの愛を真実に知ることができるのです。その時、私たちは、十字架のもとで己の罪過ちを悔い改めずにはおられません。天の父なるみ神の御前に額づかずにはおられません。主イエスが「父よ、彼らをお許してください。彼らは何をしているのか分からないからです」と今も執り成してくださるからこそ、私たちは聖霊の力により頼み、神の御前に出て悔い改める事ができるのです。私たちは、何度でも、神の御前に生きなおすことができる、やり直す事ができるのです。罪の犠牲となったしるしを刻印されたその体をもって、イエスさまが生きて、神の御許に今も働いておられるからです。時空を超えて、神の愛に私たちを活かす為に、主は天に昇ってくださいました。

4 人間の場所を確保

先ほど、イエス・キリストは「まことの神、まことの人」であり、父なる御神のもとに帰られても変わらない、と申し上げました。この地上で体を持って生きておられた「まことの神、まことの人」が、父なる御神のもとに戻られることで、「まことの人」の部分が消え去り、「まことの神、子なる神」として、神の右におられるわけではない、「まことの人」でもある神の独り子が神の所におられる、と申し上げました。それは、罪の赦しの執り成しというだけではありません。父なるみ神のすぐ近くに、被造物である人間の場所が確保された事も意味する、と言われていきます。まことの人々が父なる御神のもとに帰ることにより、造られた者として本来の人間の命が本来いるべき場所、父なる御神の御許に確保されたのです。だから、主イエスは、十字架

に架かる前の晩、弟子たちに次のように話された、とヨハネ福音書に描かれています。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」(ヨハネによる福音書第14章1節から3節)まことの神であり、まことの人であるイエス・キリストのみ傍、即ち、神のみ傍に私たちが本来生きる場所があります。私たちが最終的に落ち着く場所は、主イエスが用意してくださった場所です。だから私たちは、主イエス・キリストの昇天によって、滅びの呪いから解き放たれました。イエス・キリストの昇天以後、死は恥ずかしい事でも悪い事でも、忌まわしい事でもなくなった、肉体の死は、永遠の命の一部、神のみそばで主イエスと共に生き続ける命の始まりとなりました。

5 地上で生きる

このように申し上げますと、私たち、この地上で生きるよりも死んで主のもとに行きたい、と思ってしまう。使徒たちもそうであったでしょう。「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って言った」とありますが、この「天を見つめていた」の「見つめていた」は「凝視していた」とも訳せるような言葉です。使徒たちは、ただひたすらに、主イエスを慕い、主イエスが戻って来て自分達をも連れて行ってくれまいか、と見えなくなった主イエスを求め、空の一点に目を凝らしていたのだと思います。

その時、白い衣を着た二人の人が現れた、とルカは語ります。この「白い」は、輝くばかりの白さであり、神の栄光を表す白だと言われています。主イエスが葬られた筈の墓で、女たちの前に現れて、「あの方はここにはおられない、復活なさったのだ」と告げた二人かもしれません。天のみ使いは、使徒達に告げます。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」あなたたちがじっと見つめていても、今すぐに主イエスは戻って来られることはない、と告げた後、イエスさまが再び来られることを予告します。神の定められた時が来れば、必ず、天に昇ったのと同じご様子で来られる、と告げるのです。これは、主イエスが弟子たちと共におられる時に繰り返し語った約束でもあります。み使い達は、この言葉を弟子たちに思い起こさせることで、主が弟子たちに与えた他の言葉も思い出させたのではないかと思います。「主が再び来られるまでの間に、あなたがたにはやる事があるだろう」と使徒たちを促しました。それは、甦りの主イエスの言葉「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」です。主イエスが、愛して愛し抜いた弟子たちに残した務めです。時間は無限にあるわけではありません。主イエスが来られる

その時まで、主イエスの言いつけに生きる事こそ、あなた達の務めだよ、と天使は使徒達を促します。

それは、私たちも同じです。私たちが地上に生かされているそれぞれの命には、確固たる意味があります。私たちは、それぞれの場所で、イエス・キリストの証人として生きなさい、その言葉と行いで、イエス・キリストによってあらわされた神の義なる愛を、愛なる義を示して生きなさい、異なる言葉で言えば、「あなた達は、まことの人を目指して生きなさい、造られた者として、造り主で救い主である父なる御神との深く強い関係に生きなさい」。それが、救い主イエス・キリストと出会い、新たに生まれ変わった者として、この地上を生きる意味ではないか、と思います。だからと言って、「イエス・キリストのようになれ」というのではないと思います。主は子なる神でもあられるお方ですから、私たちがなれる存在ではありません。むしろ、「神に造られた者として、私の愛を、父なる神の愛を徹底的に利用し尽くして生きなさい、味わい尽くして生きなさい」と主は仰っているのだと思います。大丈夫、イエス・キリストに現れている父なる神の愛が尽きることなどありません。喜んで、主イエス・キリストの愛を味わい尽くしたい、と願います。

冒頭で、「天に昇った」というのは、古代世界の人々の世界観から来ている、と申し上げました。しかし、この表現が2000年間愛されて来たのは、それだけでは決してないように思います。私たち、地上に生きる人間の頭上には、天が広がっています。病に襲われ寝付いてしまった人は狭いベットだけが自分の世界だと思いがちですが、ベットがある建物の上には天が広がっています、この世の権力によって迫害を受け、狭い牢屋に閉じ込められている人も忘れがちかもしれませんが、牢屋の上には天が広がっています。この世の繁栄を謳歌し虚しく時を過ごしている人も、裏切られ傷つけられ自分の事しか考えられなくなった人も、日々の仕事に忙殺され他のことを顧みる余裕もない人も、失敗した人生に砂をかむような思いの人も、周囲の人と心が通じ合わずに苦しむ人も、「自分は誰にも必要とされない人間だ」と鋭く突きさされる孤独に悩む人も、劣等感に打ちひしがれている人も優越感に浮足だっている人も、みんなみんな、一人の例外もなく、その人の上には天が広がっています。その天には、私たちの為に十字架に架かってくださった主イエスが、父なる御神と共に生きて働いておられます。私たちの上には、一人の例外もなく、父なる御神と主イエス・キリストがおられる天が広がっています。その天から、聖なる愛の息吹が吹き降ってきています。だから、私たちは、どこまで行っても、神とキリストの眼差しの中に生かされているのです。

この事を覚えて、神の愛なる息吹、聖なる息吹に生かされている事を覚え、神を賛美し感謝し、与えられた命を懸命に生きる一週間としたい、と思います。そして、七日の旅路のあと、愛する皆さんと共に神の御前に出て、使徒信条、「主は、天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまえり」と喜びをもって高らかに告白したい、と心より願います。